

間引菜

泉鏡太郎

青空文庫

わびしさ……侘しいと言ふは、寂しさも通越し、心細さもあきらめ氣味の、げつそりと身にしむ思の、大方、かうした時の事であらう。

——まだ、四谷見つけの二夜の露宿から歸つたばかり……三日の午後の大雨に、骨までぐしよ濡れに成つて、やがて着かへた後も尚ほ冷々と濕つぽい、しよぼけた身體を、ぐつたりと横にして、言合はせたやうに、一張差置いた、眞の細い、乏しい提灯に、頭と顔をひしと押着けた處は、人間唯髯のないだけで、秋の蟲と餘りかはりない。

ひとへに寄継る、薄暗い、消えさうに、ちよろ／＼また／＼

く……あかり燈と言つては此このひとつ一點で、二階も下階も臺だいでころ所も内中うちぢゆうは眞暗まつくらである。

すくなくも、電燈でんとうが點くやうに成ると、人間にんげんは横着わうちやくで、

どうしてあんなだつたらうと思ふ、が其それはまつたく暗くらかつた。――

――實際じつさい、東京とうきやうはその一時いちじ、全都ぜんとが火の消えるとともに、此こ

の世よから消えたのであつた。

おほやけはら大焼原の野と成つた、下町したまちとおなじ事こと、殆ど麴かうちまち町の九

分ぶどほりを焼やいた火ひの、やゝしめり際ぎはを、我が家わいへを逃にげ出でたまゝの

どて土手むかうごの向越みしに見たが、黒煙くろけむりは、残月ざんげつの下したに、半天はんてんを

おほ蔽いうた忌いまはしき魔鳥まてうの翼つばさに似て、焼残やけのこる炎ほのほかしらの頭は、その血ちのし

たゝる七ななつの首くびのやうであつた。

……おもひだ
思出す。……

あらず、碧く白き東雲の陽の色に紅に冴えて、其の眞黒な
翼と戦ふ、緋の鶏のとさかに似たのであつた。

これ、夜のあくるにつれての人間の意氣である。

日が暮れると、意氣地はない。その鳥より一層もの凄^{すご}い、暗^や
闇の翼に蔽はれて、いま燈の影に息を潜める。其の翼の、時々々、
どツと動くとともに、大地は幾度もぴりりと揺れるのであ
つた。

驚破と言へば、駈出すばかりに、障子も門も半ばあけたまゝ
で。……^{かまち} 框の狭い ^{さんでふ} 三疊に、^{くだん} 件の ^{ちやうちん} 提灯に ^{すが} 縋つた、^{はな} つい鼻の先
は、^{まち} 町も ^{みち} 道も ^{おほ} 大きな ^{あな} 穴のやうに ^{みなぐら} 皆暗い。——^{くら} 暗さは ^ぜ つきぬけに全

都んとの暗夜やみに、荒海あらうみの如ごとく續つづく、とも言いはれよう。

蟲むしのやうだと言いつたが、あゝ、一層いつそ、くづれた壁かべに潛ひそんだ、波なみの巖間いはまの貝かひに似にて居ゐる。——此これを思おもふと、大なる都おほいみやこうへの上うへを、手てを振ふつて立たつて歩行あるいた人間にんげんは大膽だいたんだ。

鄰家となりはと、穴あなから少すこし、恚かう鼻はなの尖さきを出だして、覗のぞくと、おなじやうに、提灯ちやうちんを家族みんなで袖そでで包つんで居ゐる。魂たましひなんど守護しゆごするやうに、

うに——

たゞ四角よつかどなる辻つじの夜警やけいのあたりに、ちら／＼と燈ひの見みえるのも、うら枯がれつゝも散残ちりのこつた百日紅ひやくじつこうの四五輪しごりんに、可恐おそろしい夕立雲ゆふだちくもの崩くづれかゝつた状さまである。

と、時々とき／＼その中なかから、黒くろく抜出ぬけだして、登音あしおとを沈しづめて來きて、

門かどを通りすぎるかとすれば、閃々きら／＼と薄す／＼のやうなものが光ひかつて消きえる。

白刃しらばを提さげ、素槍すやりを構かまへて行くのである。こんなのは、やがて大叱おほしかられに叱しかられて、束たばにしてお取上とりあげに成なつたが……然さうであらう。

——記録きろくは慎つゝしまなければ成ならない。——此このあたりで、白刃しらばの往來わうらいするを見みたは事實じじつである。……けれども、敵かたきは唯ただ、宵闇よひやみの暗くらさであつた。

其その暗夜やみよから、風かぜが颯さつと吹通ふきとほす。……初はつ嵐あらし……可懐なつかしい秋あきの聲こゑも、いまは遠とほく遙はるかに隅田川すみだがはを渡わたる數萬すまんの靈れいの叫喚けうくわんである。……蠟燭ろうそくがじり／＼とまた滅入めいる。

あ、と言つて、其の消えかゝるのに驚いて、半ばうつゝに目を開く、女たちの顔は蒼白い。

疲れ果てて、目を睜りながらも、すぐ其なりにうとくする。呼吸を、燈に吸はるゝやうに見える。

がさり……

裏町、表通り、火を警むる拍子木の音も、石を噛むやうに軋んで、寂然とした、臺所で、がさりと陰氣に響く。

がさり……

ねずみ
鼠だ。

「叱……」

がさり……

いや、もつと近い、つぎの女中部屋の隅らしい。

がさり……

「叱……」

と言ふ追ふ聲も、玄米の粥に、罐詰の海苔だから、しつこしも、粘りも、力もない。

がさり。

畜生、……がさくと引いても逃げる事か、がさりとはかり悠悠々と遣つて居る。

氣に成るから、提灯を翳して、「叱。」と女中部屋へ入つた。が、不斷だと、魑魅を消す光明で、電燈を燦と點けて、畜生を磔にして追拂ふのだけれど、此の燈の覺束なさは、

天井てんじやうから息を掛いけると吹消ふつけされさうである。ちよろりと足あしも許とをなめられはしないかと、爪立つまだつほどに、心しんが虚きよして居ゐるのだから、だらしはない。

それでも少しばらく時は、ひつそりして音おとを潜ひそめた。

先まづは重ちようでふ疊むか、抗はむかつて齒向はむかつてでも來こられようものなら、町ち

内やうないの夜番よばんにつけても、竹たかぼうき箒おつとを押取おつとつて戦たゝかはねば成ならない

處ところを、恚かう云いふ時ときは敵手あひてが逃にげてくれるに限かぎる。

「あゝ、地震ぢしんだ。」

幽かすかながら、ハツとして框かまちまで飛返とびかへつて、

「大丈夫だいぢやうぶく々々。」

ほつとする。動悸どうきのまだ休やすまらないうちである。

がさり。

にさんじやく、
一二三尺、
今度は——
荒庭の飛石のやうに、
包んだまゝの

荷がごろくして居る。
奥座敷へ侵入した。——
此を思ふと、

いつもの天井を荒るのなどは、
ものの數ではない。

既に古人も言つた——
物之最小而可憎者、
蠅與鼠で

ある。蠅以癡鼠以黠。
其害物則鼠過

於蠅。其擾人則蠅過於鼠……
しかも驅蠅

難於驅鼠。——
鼠を防ぐことは、
虎を防ぐよりも難い……

……と言ふのである。

同感だ。——
が、
満更然うでもない。
大家高堂、
手が届

かず、
従つて鼠も多ければだけでも、
小さな借家で、
壁の穴

に氣をつけて、障子の切り張りさへして置けば、化けるほどでない鼠なら、むぎとは入らぬ。

いつもは、氣をつけて居るのだから、臺所、もの置は荒しても、めつたに疊は踏ませないのに、大地震の一揺れで、家中、穴だらけ、隙間だらけで、我家の二階でさへ、壁土と塵埃と煤と、襖障子の骨だらけな、大きなものを背負つて居るやうな場合だったから堪らない。

「勝手にしろ。——また地震だ。……鼠なんか構つちや居られない。」

あくる日、晩飯の支度前に、臺所から女中部屋を掛けて、女たちが頻に立迷つて、ものを捜す。——君子は庖廚の

事ことになんぞ、關くわんしないで居ゐたが、段々だんくちや茶まの間に成なり、座敷ざしきに及およんで、棚たな、小棚こたなを搔かきまはし、抽斗ひきだしをがたつかせる。棄すてても置おかれず、何どうしたと聞きくと、「どうも變へんなんですよ。」と不思議ふし議ぎがつて、わるく眞面目まじめな顔かほをする。ハテナ、小倉をぐらの色紙しきしや、鷹たかのいちぢく軸せんぞは先祖せんぞからない内うちだ。うせものがした處ところで、そんなに騒さわぐには當あたるまいと思おもつた。が、さて聞きくと、いや何どうして……色し紙しや一いちぢく軸せんぞどころではない。——大たい切せつな晚飯ばんめしの菜さいがない。

車くるま麩まぶが紛ふん失しつして居ゐる。

皆みなさんは、御存ごぞんじであらうか……此この品しなを。……あなた方がたが、女中ねえさんに御祝儀ごしうぎを出だしてめしあがる場所ばしよなどには、決けつしてあるものではない。かさくと乾かわいて、渦うづに成なつて、稱よぶ如ごとく眞中まんなか

に穴あなのあいだ、こゝを一寸束ちよつとたばにして結ゆはへてある……瓦煎餅かはらせんべい

の氣きの抜ぬけたやうなものである。粗ざつと水みづに漬つけて、ぐいと絞しぼつて、

醬油しやうゆで搔かきまはせば直すぐに食たべられる。……私わたしたち小學校せうがくかうへ通かよ

ふ時じぶん分に、辨當べんたうの菜さいが、よく此これだつた。

「今日けふのお菜かずは？」

「車麩くるまぶ。」

と、からかふやうに親おやたちに言いはれると、ぷつとふくれて、が

つかりして、そしてべそを搔かいたものである。其癖そのくせ、學がく校かうで、

おのゝを覗のぞきつくらする時ときは「蛇じやの目めの紋もんだい、清きよ正まさだ。」

と言いつて、負まけをしみに威張みばつた、勿論もちろん、結けつ構こうなものではない。

紅葉こうえふ先生せんせいの説せつによると、「金魚きんぎよ麩ぶは婆ばの股もの肉にくだ。」さ

うである。

成程なるほど似て居る。

安下宿やすげしゆくの菜さいに此この一品ひとしなにぶつかりと、

「また婆ばばの股ももだぜ。」

「恐おそれるなあ。」

で同人どうじんが嘆息たんそくした。——今いまでも金魚きんぎよぶ麩ほうの方は辟易へきえきする

……が、地震ちしんの四日五日よつかいつかめぐらる迄までは、此この金魚きんぎよぶ麩ほうさへ乾物かんぶつ

屋やで賣切うりきれた。また「泉いづみの干瓢かんぺう鍋なべか。車くるま麩まぶか。」と言いつて

友ともだちは嘲笑てうせうする。けれども、淡泊たんぱくで、無難ぶなんで、第一だいいち儉けんや

約くで、君子くんしの食くふものだ、私わたしは好すきだ。が言いふまでもなく、それ

どころか、椎茸しひたけも湯皮ゆばもない。金魚きんぎよぶ麩ほうさへないものを、些ちつと

は増ましな、車くるま麩ぶは猶なほ更さらであつた。

……すでに、二日の日の午後、火と煙を三方に見ながら、秋

の暑あつさは炎えん天てんより意い地ちが悪わるく、加くふるに砂さ煙えんの濛もう々くとした大

地いちに莫ご塵ざい一枚いちまいの立退たち所のきじよから、軍いくさのやうな人ひとごみを、抜ぬけつ、

潜くゞりつ、四谷よつやの通とほりへ食しよ料くれうを探さがしに出でて、煮染にしめ屋やを見みつけて、

崩くづれた瓦かはら、壁かべ泥どろの堆うづたいの踏ふんで飛とび込んだが、心こゝろあての昆布こぶの

佃つくだ煮には影かげもない。鯨はぜを見み着つけたが、買かはうと思おもふと、いつもは

小清こぎれい潔みせな店みせなんだのに、其その硝子がらす蓋ぶたの中なかは、と見みるとギョツと

した。眞ま黒つくろに煮にられた鯨はぜの、化ばけて頭あたまの飛とぶやうな、一い杯つぱいに

跳はねあ上がり飛とびまはる蠅はへであつた。あをく光ひかる奴やつも、パツあひくと相あひま

じはる。

咽喉どころか、手も出ない。

蠅も蛆も、とは、まさか言ひはしなかつたけれども、此の場合……きれいな汚いなんぞ勿體ないと、立のき場所の周囲から説が出て、使が代つて、もう一度、その佃煮に駈けつけた時は……先刻に見着けた少しばかりの罐詰も、それも此も賣切れて何にもなかつた。——第一、もう店を閉して、町中寂然として、ひしくと中に荷をしめる音がひしめいて聞えて、鎖した戸にはひかげと中にも荷をしめる音がひしめいて聞えて、鎖した戸には炎の影が暮れせまる雲とともに血をそぐやうに映つたと言ふのであつた。

繰返すやうだが、それが二日で、三日の午すぎ、大雨に弱り果てて、まだ不安ながら、破家へ引返してから、薄い味噌

汁しるに蘇よみがへ生るるやうな味あぢを覺おぼえたばかりで、罐くわんづめの海苔のりと梅干うめぼしのほかになんにもない。

不足ふそくを言いへた義理ぎりではないが……言いつた通りとほ干瓢かんぺうも湯皮ゆばも見

當あたらぬ。ふと中なかく六とほの通りなんぐわいの南外堂なんぐわいと言いふ菓子屋くわしやの店みせの、こ

の處うぐ、砂糖さとう氣けもしめり氣けも鹽氣しほけもない、からりとして、たゞ箱はこ

道具うぐの亂みだれた天井てんじやうに、つゝみ紙がみの絲いとを手繰たぐつて、くるく

とまはりさうに、右みぎの車くるま麩まぶのあるのを見みつけて、おかみさんと馴な

染じみだから、家内かないが頼たのんで、一ひとかゞり無理むりに譲ゆづつて貰もらつたので――

少々せうくおかゝを驕おごつて煮にた。肴さかなにも菜さいにも、なか／＼此この味あぢは忘わす

れられない。

――此この日ひも、晚飯ばんの樂たのみにして居ゐたのであるから。……私わたしは

實は、すき腹へ餘程こたへた。

あの、昨夜の（がさり）が其れだ。

「鼠だよ、畜生め。」

それにしても、半分煮たあとが、輪にして雑と一斤入の茶の罐ほどの嵩があつたのに、何處を探しても、一片もないどころか、果は踏臺を持つて來て、押入の隅を覗き、縁の天井うらにつんだ古傘の中まで搔きさがしたが、缺らもなく、粉も見えない。

「不思議だわね。變だ。鼠ならそれまでだけれど……」

可厭な顔をして、女たちは、果は氣味を悪がつた。——尤も引續いた可恐さから、些と上ずつては居るのだけれど、鼠も妖

に近いのでないと、恚う吹消したやうには引けさうもないと言ふので、薄氣味を悪がるのである。

「何うかして居るんぢやないか知ら。」

追つては、置場所を忘れたにしても、餘りな忘れ方だからと、女たちは我と我身をさへ覺束ながつて氣を打つのである。且つあやかしにでも、憑かれたやうな暗い顔をする。

その目の色のたゞならないのを見て、私も心細く寂しかつた。

いかに、天變の際と雖も、麩に羽が生えて飛ぶ道理がない。畜生、鼠の所業に相違あるまい。

この時の鼠の憎さは、近頃、片腹痛く、苦笑をさせられる、

あの流言蜚語とかを逞しうして、女小兒を脅かす輩の憎さとおなじであつた。……

……たとへば、地震から、水道が斷水したので、此邊、幸ひに四五箇所残つた、むかしの所謂、番町の井戸へ、家へごと
 毎から水を貰ひに群をなして行く。……忽ち女には汲ませないと言ふ邸が出来た。毒を何うとかと言觸らしたがためである。其の時の事で。……近所の或邸へ……此の界限を大分離れた遠方から水を貰ひに來たものがある。來たものの顔を知らない。不安の折だし、御不自由まことにお氣の毒で申し兼ねるが、近所へ分けるだけでも水が足りない。外町の方へは、と言つて其の某邸で斷つた。——あくる朝、命の水を汲まうとすると、

つるべ
釣瓶に一杯、汚い獣の毛が浮いて上る……三毛猫の死骸が投込
んであつた。その断られたものの口惜まぎれの悪戯だらうと言
ふのである。——朝の事で……

すぐ其の晩、辻の夜番で、私に憊う言つて、身ぶるひをした若
い人がある。本所から辛うじて火を免れて避難をして居る人だ
つた。

「此の近所では、三人死にましたさうですね、毒の入つた井
戸水を飲んで……大變な事に成りましたなあ。」

いや何うして、生れかゝつた嬰兒はあるかも知らんが、死ん
だらしいのは一人もない。

「飛でもない——誰にお聞きに成りました。」

「ぢき、横町の……何の、車夫に——」
 もう其の翌日、本郷から見舞に來てくれた友だちが知つて居た。

「やられたさうだね、井戸の水で。……何うも私たちの方も大警戒だ。」

實の處は、單に其の猫の死體と云ふのさへ、自分で見たものはなかつたのである。

天明六、丙午年は、不思議に元日も丙午で此の年、皆虧の蝕があつた。春よりして、流言妖語、壯に行はれ、十月の十二日には、忽ち、兩水道に毒ありと流傳し、市中の騒動言ふべからず、諸人水に騒ぐこと、火に騒ぐが如

し。——と此の趣が京山の（蜘蛛の絲卷）に見える。……
 諸葛武侯、淮陰侯にあらざるものの、流言の智慧は、いつ
 も此のくらゐの處らしい。

しかし五月蠅いよ。

鐵の棒の杖をガンといつて、尻まくりの逞しい一分刈の凸
 頭が「魏町六丁目が焼とるで！ 今ぱつと火を吹いた處だ、
 うむ。」と炎天に、赤黒い、油ぎつた顔をして、目をきよろ
 りと、肩をゆがめて、でくりと通る。

「晩内へ入つて寝たばかりだ。皆ワツと言つて駈出した。

「お急きなさるな、急くまい。……いま火元を見て進ぜる。」
 と町内第一の古家で、紺と白の浴衣を二枚重ねた禪門。

豫かねて禪ぜん機きを得えた居士こじだと言いふが、悟さとを開ひらいても迷まよつても、南みなが吹ふいて近きん火くわでは堪たまらない。暑あついから胸むねをはだけて、尻しり端はし折しよりで、すたくと出向でむかはれた。かへりには、ほこりの酷ひどさに、すつとこ被かぶりをして居をられたが、

「何なんの事ことぢや、おほ、成なる程ほど、焼やけとる。※と火ひの上あがつた處ところぢやが、焼やけ原はらに立たつとる土藏どじやうぢやて。あのま、駈かけまはつても近ちかまはりに最もう焼やけるものは何なんにもないの。おほ、安心あんしん々々。」

それでも、誰たれもが、此この御老體ごらうたいに救すくはれた如ごとくに感かんじて、盡くく前者ぜんしやの暴言ぼうげんを怨うらんだ。——處ところで、その鐵棒かなぼうをついた凸でこと言いふと、右禪門みぎぜんもんの一家いつか、……どころか、悴せがなれのだからおもしろい。

ぶんせいじふにねんさんぐわつにじふいちにち
 文政十二年 三月二十一日、早朝より、乾の風烈しくて、

さかりさくら ふみだ 盛の櫻を吹き亂し、花片とともに砂石を飛ばした。……巳刻

はん、神田佐久間町河岸の材木納屋から火を發して、廣さ十一里

さんじふにちやうはん 三十二町半を焼き、幾千の人を殺した、橋の焼けた事も、

ふね や 船の焼けた事も、今度の火災によく似て居る。材木町の陶

うきや つま 器屋の婦、嬰兒を懷に、六歳になる女、兒の手を曳いて、凄

い 群集のなかを逃れたが、大川端へ出て、うれしやと吻と呼

吸をついて、心づくと、人ごみに揉立てられたために、手を曳い

た兒は、身なしに腕一つだけ残つた。女房は、駭きかなしみ、

あいたん 哀歎のあまり、嬰兒と其の腕ひとつ抱きしめたまゝ、水に投じ

たと言ふ。悲惨なものもあれば、船に逃れた御殿女中が、三十

幾人、帆柱の尖から焚けて、振袖も褌も、炎とともに三百石積を駈けまはりながら、水に紅く散つたと言ふ凄惨なものもある。その他、殆ど今度とおなじやうなのが幾らもある。中には其のまゝらしいのさへ少くない。

餘事だけれど、其の大火に——茅場町の髮結床に平五郎と言ふ床屋があつて、人は皆彼を（床平）と呼んだ。——此が焼けた。——時に其の頃、奥州の得平と言ふのが、膏藥の呼賣をして歩行いて行はれた。

（奥州、仙臺、岩沼の、得平が膏藥は、

あれや、これやに、利かなんだ。

輝ななどにや、よく利いた。）

そこで床平が、自分で焼あとへ貼出したのは——

(何うしよう、身代、今の間に、床平が恚う焼けた。)

水や、火消ぢや消えなんだ。

曉方なんどにや、やつと消えた。)

行つたな、親方。お救米を噛みながら、江戸兒の意氣思

ふべしである。

此のおなじ火事に、靈岸島は、かたりぐきにするのも痛々

しく憚られるが、あはれ、今度の被服廠あとで、男女の死體

が伏重なつた。こゝへ立つたお救小屋へ、やみの夜は、わあ

ツと言ふ泣聲、たすけて——と言ふ悲鳴が、地の底からきこえ

て、幽靈が顯はれる。

しきりもない小屋内が、然らぬだに、おびえる處、一齊に突
 ツブ騒ぎ。やゝ氣の確なのが、それでも僅に見留めると、黒髪
 を亂した、若い女の、白い姿で。……見るまに影になつて、フツ
 と消える。

その混亂のあとには、持出した家財金目のものが少からず紛
 失した。娯樂ものの講談に、近頃大立ものの、岡引
 が、つけて、張つて、見さだめて、御用と、捕ると、其の幽靈
 は……女い女とは見たものの慾目だ。實は六十幾歳の婆々で、
 かもじを亂し、白ぬのを裸身に卷いた。——背中に、引剥がし
 た黒塀の板を一枚背負つて居る。それ、トくるりと背後を向
 きさへすれば、立處に暗夜の目目に消えたのである。

わたしは、安直な巻苘を吹かしながら、夜番の相番と、

おなじ夜の彌次たちに此の話をした。

三日とも経たないに……

「やあ、えらい事に成りました。……柳原の焼あとへ、何う

です。……夜鷹より先に幽霊が出ます。……若い女の眞白な

んで。——自警隊の一豪傑がつかまへて見ると、それが婆だ。

かつらをかぶつて、黒板……」

と、黄昏の出會頭に、黒板堀の書割の前で、立話

に話しかけたが、こゝまで饒舌ると、私の顔を見て、變な顔色

をして、

「やあ、」

と言つて、怒つたやうに、黒板塀に外れてかくれた。
 實は、私は、此の人に話したのであつた。

こんなのは、しかし憎氣はない。

再び幾日の何時ごろに、第一震以上の揺かへしが来る、

その時は大海嘯がともなふと、何處かの豫言者が話したとか。

何の祠の巫女は、焼のこつた町家が、火に成つたまゝ、あとから

あとからスケートのやうに駈かけまはる夢を見たなぞと、聲を密め、

小鼻を動かし、眉毛をびりりと舌なめずりをして言ふがある。

段々寒さに向ふから、火のついた家のスケートとは考へた。 …

をんなこども
 女小兒はそのたびに青く成る。

やつと二歳ふたつに成なる嬰あかんぼ兒ごだが、だゞを捏こねて言いふ事ことを肯きかないと、それ地震ぢしんが來くるぞと親おやたちが怯おどすと、

「おんもへ、ねんね、いやよう。」

と、ひい／＼泣ないて、しがみついて、小ちひさく成なる。

近きんじよ所じよには、六ろくさい歳さいかに成なる男をとこの兒こで、恐きようふ怖ふの餘あまり氣きが狂くるつて、八はち疊でふ二ふた間まを、縦たてとも言いはず横よことも言いはず、くる／＼駈かけまはつて留とまらないのがあると聞きいた。

スケートが、何どうしたんだ。

我われ聞きく。——魏ぎの正せい始しの時とき、中ちゆう山ざんの周しゆう南なんは、襄じやう邑いふの長ちやうたりき。一ある日ひこ戸こを出いづるに、門もんの石いしが垣ぎの隙すき間まから、大おほ鼠ねずみがちよろりと出でて、周しゆう南なんに向むかつて立たつた。此こ奴いつが角つの巾づきん、帛くろご

衣ろもして居ゐたと言いふ。一寸ちよつと、靴くつの先さきへ團栗どんぐりの實みが落おちたやう
 な形かたちらしい。但たゞしその風ふう豊ぼうは地仙ちせんの格かく、豫言者よげんしやの概がいがあつた。
 小狡こざかしき目めで、じろりと視みて、

「お、お、周南しうなんよ、汝なんぢ、某それの月つきの某それの日ひを以もつて當まさに死しぬべきぞ
 。

と言いつた。

したゝかな妖えうである。

ところちうざん中山だいにんぶつの大人物てんじやうは、天井てんじやうがガタリと言いつても、わツ
 と飛出とびだすやうな、やにツこいのとは、口惜くやしいが鍛鍊きたへが違ちがふ。

「あゝ、然さやうか。」

と言いつて、知しらん顔かほをして澄すまして居ゐた。……言ことばは些ちとなまぬ

るいやうだけれど、そこが悠揚いうやうとして迫せまらざる處ところである。

ねずみあなにかへる
鼠ねずみ還かへ穴あな。

その某ぼうげつ月の半なかばに、今度こんどは、鼠ねずみが周南しうなんの室しつへ顯あらはれた。ものくしく一いちいふ揖いふして、

「お、お、周南しうなんよ。汝なんぢ、月つきの幾日いくじつにして當まさに死ぬべきぞ。」
と言いつた。

「あゝ、然さやうか。」

ねずみはしらかく
鼠ねずみが柱はしらに隠かくれた。やがて、呪のろへる日ひの、其その七日なぬかまへ前に、傲がうぜ
然んと出でて來きた。

「お、お、周南しうなんよ。汝なんぢ旬日じゆんじつにして當まさに死ぬべきぞ。」
「あゝ、然さやうか。」

ちやうどなぬか
 丁度七日めの朝は、鼠が急いで出た。

「お、お、周南よ。汝、今日の中に、當に死ぬべきぞ。」

「あゝ、然やうか。」

鼠が慌てたやうに、あせり氣味にちか寄つた。

「お、お、周南、汝、日中、午にして當に死ぬべきぞ。」

「あゝ、然やうか。」

その日、同じ處に自若として一人居ると、當にその午ならん

として、鼠が、幾度か出たり入つたりした。

やがて立つて、目を尖らし、しやがれ聲して、

「周南、汝、死なん。」

「あゝ、然やうか。」

「周南、周南、いま死ぬぞ。」

「然やうか。」

と言つた。が、些とも死なない。

「弱つた……遣切れない。」

と言ふと齊しく、ひつくり返つて、其の鼠がころつと死んだ。

同時に、巾と帛が消えて散つた。魏の襄邑の長、その時思

入があつて、じつと見ると、常の貧弱な鼠のみ。周南

壽。と言ふのである。

流言の蠅、蜚語の鼠、そこらの豫言者に對するには、周

南先生の流儀に限る。

事あつて後にして、前兆を語るのは、六日の菖蒲だけれども、

そこに、あきらめがあり、一種のなつかしみがあり、深切がある。あはれさ、はかなさの情を含む。

潮のさくはない中川筋へ、夥しい鯯が上つたと言ふ。……横

濱では、町の小溝で鰯が掬へたと聞く。……嘗て佃から、「蟹

や、大蟹やあ」で来る、聲は若い、もういゝ加減な爺さんの

言ふのに、小児の時分にやあ兩國下で鰯がとれたと話した、

私は地震の當日、ふるへながら、「あゝ、こんな時には、兩國

下へ鰯が來はしないかな。」と、愚にもつかないが、事實

そんな事を思つた。

あの、磐梯山が噴火して、一部の山廓をそのまま湖の

底にした。……その前日、おなじ山の温泉の背戸に、物干

棹ざをに掛かけた浴衣ゆかたの、日盛ひざかりにひつそりとして垂たれたのが、しみ
 入いる蟬せみの聲こゑばかり、微風かぜもないのに、裙すそを翻ひるして、上うへ下したにスツ
 くあふと煽あふつたのを、生命いのちの助たすかつたものが見みたと言いふ。——はも
 の凄すごい。

恚かうした事ことは、聞きけば幾いくらもあらうと思おもふ。さきの思出おもひで、のち
 のたよりに成なるべきである。

處ところで、私わたしたちの町まちの中まん央なかを挟はさんで、大銀杏おほいてふが一樹ひときと、それ
 から、ぼぷらの大木たいぼくが一幹ひともとある。見みた處ところ、丈たけも、枝えだのかこみ
 もおなじくらゐで、はじめは對つゐの銀杏いてふかと思おもつた。——此このぼぷ
 らは、七八年しちはちねんぜん前の、あすさまの凄さまじい暴風雨ばうふううの時とき、われおどろくを驚おどろ
 かした。夜よがあけると忽たちまち見みえなく成なつた。が、屋根やねの上うへを消きえ

たので、實は幹の半ばから折れたのであつた。のびるのが早い。今では再び、もとの通り梢も高し、茂つて居る。其の暴風雨の前、二三年引續いて、兩方の樹へ無数の椋鳥が群れて來た。時に枝を争つて、揉抜かれて、一羽バタリと落ちて目を眩したのを、水をのませていきかへらせて、そして放した人があつたのを覚えて居る。

見事に群れて來た。

以前、何かに私が、「田舎から、はじめて新橋へ着いた椋鳥が一羽。」とか書いたのを、紅葉先生が見て笑ひなすつた事がある。「違ふよ、お前、椋鳥と言ふのは群れて來るからなんだよ。一羽ぢやいけない。」成程むれて來るものだと思つ

た。

暴風雨ばうふううの年としから、ばつたり來こなく成なつた。それが、今年ことし、し
 かもあの大地震おほぢしんの前の日ひの暮方くれがたに、空そらを波なみのやうに群むれて渡わた
 りついた。ぽぷらの樹きに、どつと留とまると、それからひやつぱの喧噪さわぎと言い
 ふものは、——チチツ、チチツと百羽ひやつぱにひやつぱ一度いちどに聲こゑを立て、
 バツと梢こずゑへ飛とび上あがると、また颯さつと枝えだにつく。揉もむわ揺ゆるわ。漸やつ
 と梢こずゑが静しづまつたと思おもふと、チチツ、チチツと鳴なき立たてて又また。バツと
 枝えだを飛とび上あがる。曉あけがた方たまで止やむ間まがなかつた。
 今年ことしは非ひ常じやうな暑あつさだつた。また東とうきやう京きやうらしくない、しめり
 氣けを帶おびた可い厭やな蒸むし暑あつさで、息いき苦くるしくして、寢ねられぬ晩ばんが幾い
 夜くよも續つゞいた。おなじく其その夜よも暑あつかつた。一時いちじご頃ころまで、皆みな戸おもて

へ出て涼すずんで居ゐて、何なんと言いふ騒さわぎ方かただらう、何故なぜあゝだらう、鳥からすや梟ふくろおどろに驚おどろかされるたつて、のべつに騒さわぐ譯わけはない。塹ねぐらが足りない喧けんくわ嘩わなら、銀杏いてふの方ほうへ、いくらか分わかれたら可よささうなものだ。
 — 然さうだ、ほぶらの樹きばかりで騒さわぐ。……銀杏いてふは星ほし空そらに森然しんとして居ゐた。

これは、大袈裟おほげさでない、誰たれも知しつて居ゐる。寝ねられないほど、ひつきりなしに、けたゝましく鳴な立きたたのである。

朝あさはひつそりした。が、今こんど度は人にん間げんの方ほうが聲こゑを揚あげた。「やあ、荒あらもの屋やの婆ばあさん。……何どうでえ、昨ゆうべ夜の、あの椋むくどり鳥の畜ちくしやうの生せいの騒さわぎ方かたは——ぎやあく、きいく、ばたく、ぎツノ、騒さう々／＼しくつて、騒さう々／＼しくつて。……俺おいら等ら晝ひる間ま疲つかれて

居ゐるのに、からつきし寝ねられやしねえ。もの干ほし棹ぎの長ながい奴やつを持も出して、搔かきまはして、引ひ拂つかうと思おもつても、二に本ほん繼ついでも届とくもんぢやねえぢやあねえか。樹きが高たくつてよ。なあ婆ばあさん、棕むくど鳥りの畜ちくしやう生せい、ひどい目めに逢あはしやがるぢやあねえか。」と大おほ聲ごゑで喚わめいて居ゐるのがよく聞きえた。まだ、私わたしたち朝あさ飯めしの前まへであつた。

此これが納をさまると、一ひと時ときたゞきつけて、樹きも屋や根ねも搔かきみだすやうな風あめ雨かぜに成なつた。驟しう雨うだから、東とう京きやう中ちゆうには降ふらぬ處ところもあつたらしい。息いきを吐つくやうに、一いち度ど止やんで、しばらくびつたと靜しづまつたと思おもふと、絲いとを揺ゆつたやうに幽かすかに來きたのが、忽たちち、あの大おほ地ち震んであつた。

「前兆だつたぜ——俺あ確に前兆だつたと思ふんだがね。あの前の晩から曉方までの椋鳥の騒ぎやうと言つたら、なあ、婆さん。……ぎやあくぎやあく夜一夜だ。——お前さん。……なあ、婆さん、荒もの屋の婆さん、なあ、婆さん。」

氣の毒らしい。……一々、そのほぷらに間近く平屋のある、荒もの屋の婆さんを、辻の番小屋から呼び出すのは。——こゝで分つた——植木屋の親方だ。へゞれけに酔拂つて、向願巻で、鋏の抜けた柄の奴を、夜警の得ものに突張りながら、

「なあ、婆さん。——荒もの屋の婆さんが、知つてるんだ。椋鳥の畜生、もの干棹で引掻き、いってくれようと、幾度飛出したか分らねえ。樹が高えから届かねえぢやありませんかい。

然うだらう、然うだとも。——なあ、婆さん、荒もの屋の婆さん、

なあ、婆さん。」

ふり す鍬の柄をよけながら、いや、お婆さんばかりぢやあり

ません、皆が知つてるよ、と言つても酔つてるから承知をしな

い。「なあ、婆さん、椋鳥のあの騒ぎ方は。」——と毎晩の

やうに怒鳴つたものである。

……話が騒々しい。……些と静にしよう。それでなくてさ

へのぼせて不可い。あゝ、しかし陰氣に成ると氣が滅入る。

がさり。

また鼠だ、奸黠なる鼠の豫言者よ、小畜よ。

きて、くるまぶ車麩ゆくへの行方は、やがて知れた。魔まが奪とつたのでも何なんでもない。ぢしんさわ地震騒ぎのがらくただの、風呂敷ふるしきづつみ包を、ごつたにし
たゝか積つみかさ重ねた床とこの奥おくの隅すみの方に引ひ込んであつたのを後のちに見みつけた。畜ちくしやう生。水道すゐだうが出て、電燈でんとうがついて、豆腐屋とうふやが
來くるから、もう氣きが強つよいぞ。

……齒はがたの着ついた、そんなものは、掃溜はきだめへ打棄うちちやつた。
がさり。がらくくく。

あの、通とほりだ。さすがに、疊たゝみの上うへへは近ちかづけないやうに防ふせぐが、
天井裏てんじやうらから、臺だい所ところ、鼠ねずみの殖ふえたことは一ひと通りでない。
近所きんじよで、小ちひさな兒こが、おもちやに小庭こにはにこしらへた、箱庭はこには
のやうな築山つきやまがある。——其處そこへ、午後二時ごごにじごろ、眞日中まっぴなかと

も言はず、毎日まいにちのやうに、おなじ時間じかんに、縁えんの下したから、のそ／

＼と……出でたな、豫言者よげんしや。……灰は色いろで毛けの禿はげた古ふる鼠ねずみが、

八九疋はつくひきの小鼠こねずみをちよろ／＼と連つれて出でて、日比谷ひびやを一散歩ひとさんぽ

と言いつた面つらで、桶をけの輪わぐらゐに、ぐるりと一巡ひとめぐり二三度にさんどして、

すまして又縁またえんの下したへ入はいつて行く。

「氣味きみが悪わるくて手てがつけられませんか。」

「地震ぢしん以來いらい、ひとを馬鹿ばかにして居ゐるんですな。」

と、その親おやたちが話はなして居ゐた。

「……車くるま麩まぶだつてさ……持もつて來きたよ。あの、坊ぼうのお庭にはへ。――

――山のね、山やまのまはりやまを引張ひっぱるの。……車くるまの眞似まねだか、あの、オ

ートバイだか、電でん車しゃの眞似まねだか、ガツタン、ガツタン、がう：

…

と、その七つに成る兒が、いたいけにまた話した。

わたしなん
私も何だか、薄氣味の悪い思ひがした。

はへ
蠅の湧いたことは言ふまでもなからう。鼠がそんなに跋扈して

は、夜寒の破襖を何うしよう。

のねずみ
野鼠を退治るものは狸と聞く。……本所、麻布に續いては、

この邊が場所だつたと言ふのに、あゝ、その狸の影もない。いや、

何より、こんな時の猫だが、飼猫などは、此の頃人間と

もに臆病で、猫が（ねこ）に成つて、ぼやけて居る。

とき
時なるかな。天の配劑は妙である。如何に流言に憑いた鼠

でも、オートバイなどで人もなげに駈られては堪らないと思

ふと、どしん、どしん、がらく／＼がらと天井を追つかけし、溝の中で取つて倒し、組んで噛みふせる勇者が顯はれた。

渠は鼬である。

然まで古い事でもない。いまの院線がまだ通じない時分には、土手の茶畑で、狸が、ぼつたを壓へたと言ふ、番町邊に、いつでも居さうな蛇と鼬を、つひぞ見た事がなかつたが。……それが、溝を走り、床下を抜けて、しば／＼人目につくやうに成つたのは、去年七月……番町學校が一焼けに焼けた前後からである。あの、時代のついた大建ものの隨處に巢つたのが、火のために散つたか、或は火を避けて界限へ逃げたのであらう。

不^ふ斷^{だん}は、あまり評^{ひやう}判^{ばん}のよくない獸^{やつ}で、肩^{かた}車^{ぐるま}で二十^{にじつ}疋^{びき}、
 三十^{さんじつ}疋^{びき}、狼^{おほかみだち}立^つに突^つ立^つつて、それが火^ひ柱^{しら}に成^なるの、三^み聲^{こゑ}續^つ
 けて、きちくとなくと火^ひに祟^たるの、道^{みち}を切^きると悪^{わる}いと言^いふ。
 ……よく年^{とし}よりが言^いつて聞^きかせた。——翻^{ひる}つて思^{おも}ふに、自^{おのづ}から忌^い
 み憚^はるやうに、人^{ひと}の手^てから遠^{とほ}ざけて、渠^{かれら}等^らを保^ほ護^ごする、心^{こころ}あつた
 古^{こじん}人の苦^く肉^{にく}の計^{はかりごと}であらうも知^しれない。
 一^{いつ}體^{たい}が、一^{ちよつ}寸^と手^て先^{さき}で、障^{しやう}子^じの破^{やぶ}穴^{れあな}の樣^{やう}な顔^{かほ}を撫^なでる、
 額^{ひたひ}の白^{しろ}い洒^{しや}落^れもので、……
 越^ゑ前^{ちぜん}國^{のくに} 大^{やまが}野^{むら}郡^{の村}の山^{こと}家^{の事}である。春^{はる}、小^こ正^{しやう}月^{ぐわつ}の
 夜^よ、若^{わか}いものは、家^{いへ}中^{ぢゆう}みな遊^{あそ}びに出^でた。爺^{ぢい}さまも飲^のみに行^ゆく。う
 き世^よを濟^すました媪^{ばあ}さんが一^{ひとり}人^ら、爐^ろ端^{ばた}に留^る守^すをして、暗^{くら}い灯^{とも}で、絲^い

とぐるま

車

をぶうくと、

藁屋の雪が、

ひらがなで音信れたやうな昔

を思つて、

糸を繰つて居ると、

納戸の障子の破れから、

すき漏る風とともに、

すつと茶色に飛込んだものがある。

白面黄

毛の不良青年。

見紛ふべくもない

鼪で。木尻座の筵に、ゆ

たかに、

角のある小判形に

こしらへて積んであつた餅を、

一枚、

もう手、

前脚で抱込むと、

ひよいと翻して、

頭に乘せ

て、

一つ軽く

蜿つて、

伸びざまにもとの障子の穴へ消える。

消

えるかと思ふと、

忽ち出て来て、

黙つて又餅を頂いて、

すつと引

込む。

「おゝゝ悪い奴がの……そこが畜生

の浅ましきぢや、

澤山然うせいよ。

手を伸ばいて障子を開ければ、

すぐに人間

に戻るぞの。」と、

媪さんは、

つれ／＼の夜伽にする

氣で、

巧

巧

に戻るぞの。」と、

媪さんは、

つれ／＼の夜伽にする氣で、

な、その餅もちの運び方はこを、ほくそ笑ゑみをしながら見みて居ゐた。

若わかいものが歸かへると、此この話はなしをして、畜ちく生しやうの智ち慧ゑを笑わらふ筈はずが、

豈あにはか計はからんや、ベソを搔かいた。餅もちは一切ひとときれもなかつたのである。

程ほどたつて、裏山うらやまの小山こやまを一つ越こした谷間たにあひの巖いはの穴あなに、堆うづたかく、

その餅もちが蓄たくはへてあつた。鼬いたちは一つでない。爐端ろばたの餅もちを頂いたゞくあとへ、

手てを揃そろへ、頭あたまをならべて、幾いく百ひやくか列れつをなしたのが、一息ひといきに、

山やま一つ運はこんだのであると言いふ。洒落しやれれたもので。

……内うちに二三年遊あそんで居ゐた、書生しよせいさんの質實じみな口くちから、然しか

も實驗談じつげんだんを聞きかされたのである。が、聊いさか巧たくみに過すぎると思おもつた。

後のちに、春陽堂しゆんやうだうの主しゆじん人に聞きいた。——和田わださんがまだ學がく

校うがよひをして、本郷ほんがう彌生町やよひちやうの、ある下宿げしゆくに居ゐた時とき、初し

夏よかゆふべの夕しのぼず、不はす忍おもの蓮おもも思おもはず、然さりとて數すきやまち寄屋町あだの婀娜おもも思おもはず、

下階したの部屋へやの小窓こまどに頬杖ほづゑをついて居ゐると、目めの前まへの庭にはで、牡をんど

鶏りがけた、ましく、鳴なきながら、羽はを煽あふつて、ばたくと二に三さん

尺やくとびあが飛とびあが上あがる。飛とびあが上あがつては引据ひきすゑらるゝやうに、けた、ましく

鳴ないて落おちて、また飛とびあが上あがる。

講かうしやくし釋やくし師しの言いふ、槍やりのつかひてに呪のろはれたやうだがと、ふと見み

ると、赤煉蛇やまかゞしであらう、たそがれに薄うすあか赤あかい、凡およそ一いつ間けん、六ろ

尺くしやくに餘あまる長なが蟲むしが、崖がけに沿そつた納屋なやに尾ををかくして、鎌かまくび首び

が鶏とりに迫せまる、あます處ところ四五寸ごすんのみ。

和田わださんは蛇へびを恐おそれない。

遣やり放ばなしの書しよせい生せいさんの部屋へやだから、直すぐにあつた。――杖ステツキを

取るや否や、畜生と言つて、窓を飛下ると、何うだらう、たゞきもひしぎもしないうちに、其の蛇が、ぱつと寸々に斷れて十あまりに裂けて、蜿々と散つて蠢いた。これには思はず度肝を抜かれて腰を落したさうである。

が、蛇ではない。這つて肩車した、鼬の長い列が亂れたのであつた。

おほのはなしうなづ
大野の話も領かれて、そのはたらきも察しらるゝ。

かの、(リノキ、チツキテビー)よ。わが鼬將軍よ。いたづらに鳥など構ふな。毒蛇を咬倒したあとは、希くは鼠を獵れ。蠅では役不足であらうも知れない。きみは獸中の隼である。……

大正十二年十一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「間引菜《まびきな》」とルビがついていません。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

間引菜

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>